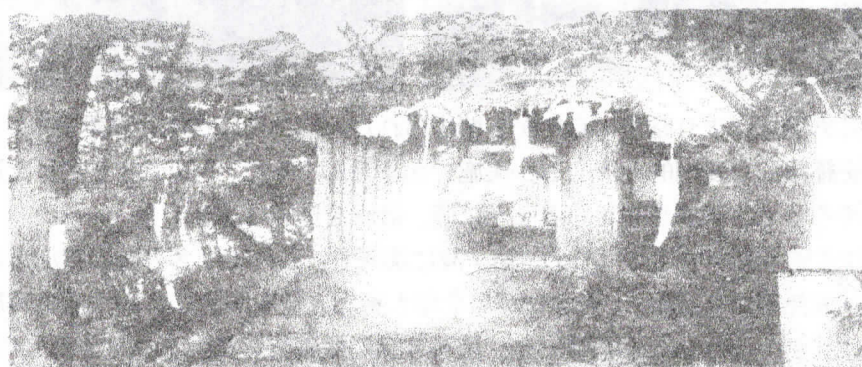
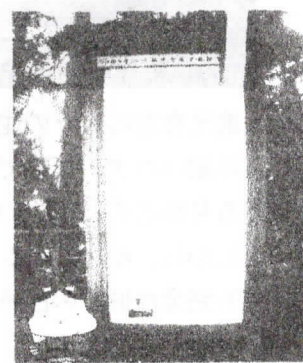


- | | | |
|-----------------|-------------------|---------------|
| 大津市教育長賞 | 『夏祭り慣れない下駄とばんそこう』 | 北大路中3年(三上 優菜) |
| 幻住庵保勝会長賞 | 『かき氷中にしずんだ夢を見た』 | 晴嵐小6年(久世 智也) |
| 幻住庵保勝会長賞 | 『剣道部気合の音が響く夏』 | 北大路中1年(緒方裕希人) |
| 晴嵐学区青少年学区民会議会長賞 | 『雷が鳴ると急いで猫になる』 | 晴嵐小6年(井上珂奈子) |
| 晴嵐学区青少年学区民会議会長賞 | 『夏終わり水だけ残る金魚鉢』 | 北大路中3年(津田 康太) |
| 優秀賞 | 『湖畔へとキャンプに行つて星千万』 | 晴嵐小6年(川口結津葵) |
| 優秀賞 | 『なぜだろう朝だけ開く蓮の花』 | 晴嵐小6年(西垣 聡祐) |
| 優秀賞 | 『木漏れ日が足元照らす初夏の森』 | 北大路中2年(松田 隼) |
| 優秀賞 | 『お盆の日庭に来た鳩亡き祖父かな』 | 北大路中2年(小谷 優斗) |
| 優秀賞 | 『風鈴がきれいに鳴つて夏が来た』 | 北大路中1年(藤崎 瑛大) |
| 優秀賞 | 『一人見た無音の花火先想う』 | 北大路中3年(堀池 晴) |



庵門前の六年生の俳句短冊と一般の部特別賞の短冊



中学生俳句と入賞者一覧

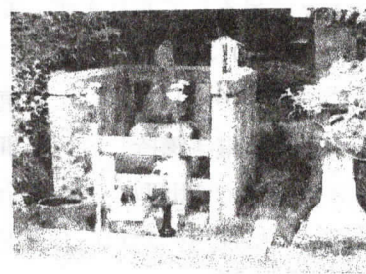
芭蕉はなぜ義仲寺に葬られたのか

一芭蕉と近江とのかかわりについて考える

芭蕉と近江

松尾芭蕉(1644~94年)が初めて近江に来たのは、亡くなる9年前の貞享2(1685)年、「野ざらし紀行」の旅の途中でした。京都滞在中に、堅田・本福寺の住職・三上千那の要請を受けたからです。近江に来て、「辛崎の松は花より臙にて」との句を詠んでいます。

以後、6回、近江を訪れ、2年続けて越年しています。これは江戸に出てからはじめてのことでした。びわこに魅せられたのでしょう。芭蕉は生涯、980句の発句を残しています。近江で89句詠んでいますから、江戸に次いで多いだろうと私は思っています。芭蕉の有力な門人36人を選んで、その肖像を画いた『蕉門三十六歌仙図』というのがあります。(与謝蕪村の筆になるともいわれていますが、そうではないようです)。義仲寺の「翁堂」にも掲げられています(これはコピー)。12人の比重の大きさが分かりますね。晩年の芭蕉にとって、近江が一番かかわりの深い土地だったのです。



義仲寺にある松尾芭蕉の墓

芭蕉はなぜ義仲寺に葬られたのか

芭蕉元禄7(1694)年9月末、大阪で病に倒れました。急を聞いて近江の門人たちが駆けつけ、看病しました。しかし、結局、10月12日に亡くなりました。享年51歳でした。

郷里の伊賀上野には兄も健在で、菩提寺もありました。しかし、芭蕉は「骸は木曾塚におくるべし」と遺言しました。そこで、遺体は近江の門人たちの手でその日のうちに舟で淀川をさかのぼり、伏見まで運ばれ、明るる日、大津に到着しました。14日、義仲寺で、義仲の墓の隣に葬られました。300人余りの会葬者があったといひます。(保勝会前理事 山田 稔)